



二度童子への不安

リポーター 柳沢 トキ子 (釈迦内)

平成元年度広報市民リポーターだよりの第一回目です。今回は、二度童子ともいわれるボケ老人問題に焦点をあてた柳沢リポーターと、農業経営の規模拡大に寄せる農業青年の期待と課題を取材した虻川リポーターを紹介します。

高齢化社会と言われている現在、心身に障害を持つお年寄りの介護の問題は重大です。特に濃厚な介護を必要とする痴呆性老人の場合、世話をする家族の方々のご苦労は並大抵ではなく、今日大きな社会問題となつています。そこで福祉事務所をたずね、高齢者福祉担当主査の長谷川さんからお話しを伺ってきました。

今、なぜボケが問題になつていくのでしょうか。これまでではそれほど顕在化していませんが、深刻に取り上げられることになった原因の一つに、私たち日本人の平均寿命の急速な伸びをあげることがあります。

現在平均寿命は、男性七十五



柳沢リポーター(左)

六歳、女性八十一・四歳となつていきます。市の高齢者人口(六十五歳以上)は、六十三年九月十五日現在で九千八百二十七人となつており、高齢化率は一四%。全国平均の一・二%を約三ポイントも上回つて、急速に高齢化が進行していると説明していただきました。

けれども古いへ向かつて行きます。そしてだれもが、家族に迷惑がかかるから絶対にボケたくなないと考えています。二度童子とも言われるボケ老人、しかし、もしボケたらどうなるのだろうかという不安があります。介護する人が病気になるたり、疲れて休みが欲しくなつたりしたとき、

預つてくれる施設があるのだろうかと同じところ、特別養護老人ホームに三人から四人分のベッドは常に用意してあるとのことでした。しかし、不思議なことに利用する人が少ないそうです。あまり知られていないのではないかと思います。

赤ちゃんはだれでもが手のかかるものと理解していますが、子供にかえった痴呆性老人はなかなか理解しがたく、介護者がイライラしたり怒つたりすると、

規模拡大と農業青年

リポーター 虻川 博司 (櫃崎)

消費税の導入、農畜産物の輸入自由化、食管理制度の見直しなど、農業を取り巻く現状は極めて急です。このような中で、将来の農業を確立すべく、規模拡大のための方法として農業経営受委託というものが、ここ数年クローズアップされてきています。そこで、農業青年の組織である農協青年部の方々から、農業経営受委託の現状と問題点、そして今後についてお話しを伺いました。

まず、市内における農地の受委託面積は約二百ヘクタールで、全農地の四%ほどしかありません。これは農業委員会へ届け出があつたものだけですが、こ

ますます不安定な精神状態に追いやることになりま。福祉事務所では、施設と一緒に泊まつて介護技術を覚えてもらうことや、特にボケ老人に多い徘徊、不眠、興奮、大声を出すなどで、介護者が夜も眠れず健康を害するようなことのないように、夜だけ預かるナイトケアなどを現在構想中だそうです。夜だけでもゆっくり休めたら、介護者はどんなに助かるでしょう。一日も早い実現を期待しています。

のように面的にはまだ少なく、受委託にはいろいろな問題があるような気がします。

農地や農作業の受委託等、いわゆる農業経営受委託は規模拡大が目的ですが、農地の遠隔化がみられ、作業効率の低下を招いているとのこと。また、委託者が同集落内の人に委託したがるという感情的な面もあり、円滑な推進のための体制作りが必要だということでした。農協青年部が昨年、部員を対象にアンケート調査した結果、規模拡大を積極的に図りたいという回答が過半数にも及び、同青年部は、規模拡大へ向けての何らかの方策、体制作りを農協へ要



虻川リポーター(右端)

望したそうです。これについて農協の専務に伺つたところ、平成元年度の通常総会で、営農指導事業の一環として、農業経営受委託事業推進体制の確立ということで承認され、今年度は作業受託並びに経営受託推進のため、組合員の意向調査を実施することになつていくそうです。いろいろ書きましたが、農業者は労働者ではなく経営者にならなければいけないと思つて、資本を管理・運用していくという意識がなければ、いくら規模を拡大し、所得が増えても、真の農業経営者とはいえないと思つています。市場開放や価格低迷が続く中で、旧態依然としたドンブリ勘定の経営では、せっかくの規模拡大も意味をなしません。こうしたことから優れた経営管理能力と企業者精神を持った農業青年が、これからの農業のリーダーシップをとっていかなくてはならないと思つています。